日刊 産業新聞
Japan Metal Bulletin
2023年（令和5年）2月21日（火）
第20628号
Since1936

清水、H形鋼開先機稼働

一次加工2ライン体制

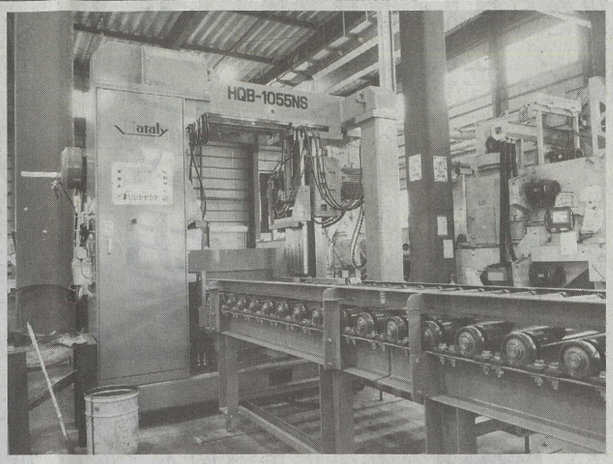
鋼材加工販売の清水（本社＝鳥取市、清水昭生社長）は、本社近隣にある型鋼第1工場にH形鋼用開先機を導入し、2月から稼働を始めた。穴開け・切断・開先の一次加工ラインを2ラインに増やした。加工効率を高め、建築鉄骨向けの受注増に対応する。

導入したのは、ハタリー製のH形鋼開先機「HQB－1055NS」。加工できるH形鋼のウェブ高さは200－1000ミリまで。スカラップ、ノンスカラップ加工にも自動で対応する。

型鋼第1工場はH形鋼の一次加工をメインに手掛ける。これまで加工は、加工ラインと切断・穴開けの複合加工機で対応しており、開先機は加工ラインの1基を併用していた。近年は鉄骨ファブリケーターの人材不足で一次加工の依頼が増加傾向にあり、受注状況によっては昼間の操業だけでは加工が追い付かないことがあったため、開先機を増設した。

同社は本社近隣に各種加工の7工場を構える。今後も各工場で老朽化した設備のリプレースなど継続し、加工能力の増強を進めていく方針だ。

清水は1958年設立の地区有力鋼材流通。鋼材全般のほか、特殊鋼や非鉄金属も扱い、向け先は建築、産業機械など。レーザー加工機、プラズマ・ガス切断機、シャーリング機、プレスブレーキ、オートボーラー、ビームワーカー、溶接機、マシニングセンターといった設備を保有し、製缶品の製造も手掛ける。2022年7月期の売上高は41億円。



導入した開先機

清松総合鉄工

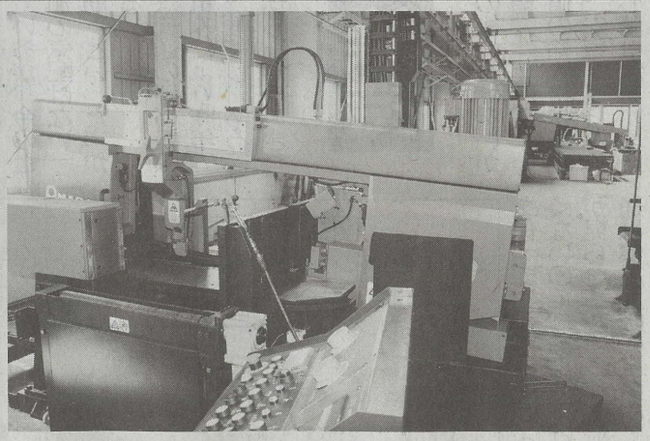
バンドソー1基更新

一次加工を内製化

大分県北部のHグレード鉄骨ファブリケーター、清松総合鉄工（本社＝宇佐市、清松芳夫社長）はこのほど本社・第5工場のバンドソー1基を更新した。老朽化に伴うもので最新鋭機に切り替えることで安定操業体制を強化。斜め切断も可能になったほか、加工量も従来に比べて50％向上したことから一次加工の内製化を進めたい考え。

今回、導入したのはアマダマシナリーの形鋼切断用バンドソー「HK－650」。幅は従来と同じ650ミリまで切断可能。第5工場は2017年に新設。鋼材一次加工場として、切断や穴開け、ショット、開先までの加工を手掛ける。バンドソーは同工場開設とあわせて1300ミリ対応のものを導入し、合計2基保有。一方、650ミリ対応のものは稼働から30年近くが経過し、部品の調達が困難なことから最新鋭機に更新した。

従来の設備ではできなかった角度をつけた切断も可能で加工能力は50％向上。複数物件を同時並行で手掛けることが多いため可能な範囲で切断加工の内製化を進めたい考え。


導入したバンドソー（右奥は1300ミリ対応のバンドソー）

日刊 産業新聞 Japan Metal Bulletin 2023年（令和5年）2月21日 火曜日
西日本ネットワーク
中国・四国・九州・沖縄
JAPAN METAL BULLETIN Local Network
福岡支局 FUKUOKA
〒812-0011 福岡市博多区博多駅前3丁目23番22号 シティ22ビル
TEL (092) 472－3887 FAX (092) 472－3888